不適条件表現に関する覚書

―現代日本語の二種の文法現象をめぐって―

田野村　忠　温*

A note on *noni* and its equivalents in modern Japanese

Tadaharu TANOMURA

この覚書では，現代日本語の二種の文法現象に若干の考察を加え，いずれの現象をも支配していると思われる「不適条件表現」なる概念を導入する．Ⅰでは，一種の述語句の省略と見得る現象を問題とする．Ⅱでは，従来，接続助詞『のに」の使用に対する制約として指摘されてきた現象について，さらに包括的な視点より再考する．

Ⅰ　述語句省略

1　問題

次の対話中の応答の文（乙）における「のに」の働きは，この語の通常の働きとは性質を異にしている．

（1）　甲：テレビ買い替えようよ，リモコン式のに．
　　乙：まだ映るのにもったいないわよ．

このことを確認するには，先ず，「のに」の通常の意味・用法を明らかにしておく必要がある．

2　「のに」の意味・用法

「PのにQ」という形の表現は，「Pである以上，～Q（＝Qではない）」との話者の予想または期待に反し，Pでありながらなお Q が成立することを表す．

例えば，

（2）　冬なのに暖かい．

という文は，「冬である（P）以上，暖かくない（～Q）」との話者の予想が不実現であることを表す．また，

（3）　きれいに咲いたのにすぐしぼんでしまった．

は，「きれいに咲いた（P）以上，当分咲き続ける（～Q）」という話者の期待が実現しなかったことを表す．[1)]

以後，「のに」を含む文の意味構造を，

* 国文学研究室（昭和63年9月30日受理）

（2′）　［［$_P$冬な］のに［$_Q$暖かい］］

（3′）　［［$_P$きれいに咲いた］のに［$_Q$すぐにしぼんでしまった］］

のように表すことにする．

3　述語句省略

ところが，上の（1）の意味を，（2）や（3）の場合に倣って説明することは不可能である．無理にそれを試みると，（1）は，「まだ映る（P）以上，もったいなくない（～Q）」という話者の予想または期待に支えられていることになる．しかし，無論，そのような予想や期待は意味を成さない．

問題は明白であろう．（1）は，「～のに～」の形をしてはいるが，上述の「PのにQ」の意味構造に直接対応していないのである．具体的に言えば，「まだ映る」を「PのにQ」のPと見ることに問題はないが，「もったいない」はQではないということである．真のQは，言外に表現されている ── 省略されているとここでは考える ── のである．

省略された部分を補うことで，（1）は，概略，次のような意味構造を有するものとして理解することができよう．

（1′）　［［$_P$まだ映る］のに［$_Q$買イ替エル］］トハもったいない

結局，（1）は，（1′）のような構造から，「買い替えるとは」の部分が省略されることによって成立しているものと見られる．文の主題である「まだ映るのに買い替えるとは」の部分から，その主要部たる「買い替えるとは」が省略されているわけである．誤解の恐れもあるが，述語句「買い替える」が省略されているという意味で，以後，これを短く「述語句省略」の現象と称する．そして，述語句省略を含む（1）のような文を「述語句省略文」と称することにする．[2)]

4　述語句省略文の例の追加（ア）── 譲歩の接続助詞を含む例 ──

述語句省略文の例をさらにいくつか挙げて見よう．

（4）　（旅行中止の報を受けて）楽しみにしていたのに残念だ．

（5）　せっかく人が手伝ってあげるって言ってるのにかわいくないの．

（6）　（寝小便した子供に対して）何です？小学生になったのにだらしない．

（7）　（玄関のチャイムが鳴って）こんなに雨が降っているのに一体誰だろう．

（8）　習い始めたばかりなのに大したもんだ．

（9）　お酒強くもないのにやめときなよ．

これらは，概略，次のような意味構造を持つものと考えられる．

（4′）　［［$_P$楽しみにしていた］のに［$_Q$中止ニナッタ］］ノハ残念だ

（5′）　［［$_P$せっかく人が手伝ってあげるって言ってる］のに［$_Q$断ル］］トハかわいくないの

（6′）　［［$_P$小学生になった］のに［$_Q$寝小便スル］］トハだらしない

（7′）　［［$_P$こんなに雨が降っている］のに［$_Q$訪ネテ来ル］］トハ一体誰だろう

（8′）　［［$_P$習い始めたばかりな］のに［$_Q$コレダケ上手ニデキル］］トハ大したもんだ

（9′）　［［$_P$お酒強くもない］のに［$_Q$マダ飲モウトシテイル］］　やめときなよ

以上はいずれも「のに」を含む例であったが，「のに」に意味上近接する「ながら」「くせに」等でも同様に述語句省略が可能である．

（10）　人には休むなと言っておきながら勝手な人ね．

（11）　何も知らないくせに黙ってろ．

これらも，次のように理解すべきものであろう．

（10′）　［［$_P$人には休むなと言っておき］ながら［$_Q$自分ハ休ム］］トハ勝手な人ね

（11′）　［［$_P$何も知らない］くせに［$_Q$口ヲ挿ミタガル］］　黙ってろ

5　述語句省略文と疑似譲歩文

述語句省略の現象は，坂原茂氏の言われる「疑似譲歩文」を想起させる一面を有するものである．[3]　しばし本題を離れることになるが，述語句省略文と疑似譲歩文の関係について一言しておく．

疑似譲歩文とは，譲歩文の形をしていながらも，譲歩文の意味構造をそのまま実現していないものを言う．

（12）が，疑似譲歩文の例として坂原氏が挙げておられるものである．

（12）　藤田はいくら勉強しても，頭が悪すぎる．

この文は「ＰてもＱ」の意味構造を直接に反映してはいない．（12）の根底にある話者の表現意図は，むしろ，次のようなものであると考えられる．

（12′）　藤田はいくら勉強しても，頭が悪すぎるカラ志望大学ニハ受カラナイ．

即ち，（12）の「ても」が表現する譲歩の意味構造は，

（12″）　［［$_P$藤田はいくら勉強し］ても［$_Q$志望大学ニハ受カラナイ］］

であるのだが，Ｑの部分は直接には表現されない．代わりに，話者は，「頭が悪すぎる」と述べることで，そこからＱを推論するよう聴者を導くのである．坂原氏の表現に従えば，「頭が悪すぎる」の部分は，「明示されない結論を探し出すための指令」「ある結論を指し示す理由節」なのである．

さて，表面構造と意味構造の乖離を以て疑似譲歩文の認定基準とするならば，述語句省略文も疑似譲歩文の一種だということになる．

もっとも，述語句省略文と，坂原氏が問題とされた種類の疑似譲歩文とでは，表面構造と意味構造の乖離の様子が異なる．両種の文の相違を簡略に図式化して示せば，次のようになる．ここで，譲歩の意味構造における前件と後件を，それぞれ，Ｐ，Ｑとする．Ｒは，本来後件Ｑが現れるべき位置に，Ｑの代わりに現れた表現の意味である．また，直接に表現されない部分を丸括弧で囲んで示す．

（13）　述語句省略文　　［Ｐのに（Ｑ］トハ），Ｒ

（14）　疑似譲歩文　　［Ｐても，Ｒ（カラＱ）］

述語句省略文を疑似譲歩文と呼ぶか否かは，畢竟，疑似譲歩文の定義の問題である．しかし，いずれにせよ，（13）と（14）の相違を別としても，述語句省略は坂原氏の疑似譲歩文とは異質の現象と見るのが妥当であろうと思われる．これには二つの理由がある．

第一に，述語句省略文において省略される述語句は，文脈上何らかの形で既に与えられているものである．先の（１）の例では，相手が「買い替えよう」と提案したのを受けての省略であった．同様に，（４）～（10）の例においても，相手の発言か，談話の状況で既に了承された事柄に相当するものが省略を受けている．

これに対し，疑似譲歩文における省略はそうした性質のものではない．むしろ，聴者は，省略された部分を自分で推論することを要請されているのが普通である．このことは，疑

似譲歩文の後件を「明示されない結論を探し出すための指令」であるとする坂原氏の特徴付けに既に表されているが，次の対話に即して確認しておきたい．

(15)　甲：藤田は志望大学に合格するだろうか．よく勉強しているようだけど．
　　乙：あいつなんかいくら勉強しても頭が悪すぎるよ．

乙の発言以前には，藤田の不合格ということは先行談話中に一切現れていない．乙はそうした状況の下で，疑似譲歩文を発することにより，藤田に合格の見込みがないことを文脈上初めて主張しているわけである．

結局，述語句省略文における省略は，疑似譲歩文における省略とは異なり，文脈上既知の要素の反復を避けるという性質のものであろうと思われる．この意味では，述語句省略は，

(16)　甲：それは何ですか？
　　乙：（コレハ）焼酎です．

のような，ごく普通に問題とされる省略の現象と軌を一にするものと言ってよいと思われるのである．

第二に，第4節までに見た述語句省略文の例は，いずれも，譲歩を表す（いわゆる）接続助詞「のに」「ながら」「くせに」等を含むものであったが，実は，これと本質的に同じであると思われる現象が，さらに広い範囲にわたって認められる．これより本題に戻り，その様子を次節で概観する．なお，以後，「述語句省略」「述語句省略文」の語は，拡大した範囲の現象に対して用いることとする．

6　述語句省略文の例の追加（イ）――譲歩の接続助詞を含まない例――

省略された述語句に係って行く成分――第4節までに挙げた例について言えば，「～のに」「～ながら」「～くせに」の部分――が，省略されたその述語句に対して意味上どのような関係にあるかに応じて，いくつかの場合に分けて例を示す．省略されていると見られる述語句（および，適当なつなぎの表現）を括弧内に補って示す．

〔時刻〕

(17)　こんな夜中に（訪ネテ来ルトハ）一体誰だろう．
(18)　こんな朝早くから（オ伺イスルノハ）御迷惑だとは思ったのですが…．
(19)　真夜中に（楽器ヲ演奏スルトハ）うるさいぞ．
(20)　こんなに早く（現レルトハ）珍しいわね．

〔時間，頻度〕

(21)　朝から晩まで（同ジ曲ヲ聴イテ）よく飽きないことだ．
(22)　毎日（働イテクレテ）御苦労様．
(23)　いつもいつも（気ヲ遣ッテクダサッテ）すみません．
(24)　毎度（御来店クダサイマシテ）有難うございます．

〔背景，状況〕

(25)　こんな雨の中を（来テモラッテ）悪いねえ．
(26)　皆がこうして働いている時に（旅行ニ行クナンテ）いい気なもんだよ．
(27)　自分から言い出しておいて（先ニヤメルトハ）ずるいよ．
(28)　そんな…．前もって相談もなしに（一人デ決メルトハ）随分勝手ね．

〔原因〕

(29)　一度の失敗くらいで（クジケルトハ）情けないわね．

(30)　転んだくらいで（泣クトハ）弱虫ねえ．

(31)　私があんなことを言ったばかりに（大変ナコトニナッテ）すまない．

(32)　僅かのお金のことで（人ガ殺サレルトハ）恐ろしいことだ．

〔目的〕

(33)　たったあれだけのことのために（コレホドノ準備ガ要ルトハ）大変ね．

(34)　私一人の都合のために（会ヲ延期シテイタダイテ）申し訳ない．

〔様態，条件〕

(35)　たった一人で（オ遣イトニ行クトハ）偉いわねえ．

(36)　わざわざ（オコシイタダイテ）すみません．

(37)　御丁寧に（オ知ラセ下サリ）有難うございます．

(38)　少しおだてるだけで（スグ言ウコトヲ聞クトハ）単純な人ね．

(39)　たったこれだけのことで（文句ヲ言ウトハ）うるさいなあ．

〔述語の項〕

(40)　裁判官ともあろう人が（盗ミヲ働クトハ）何ということだ．

(41)　こんなにかわいい子供を（殺ストハ）酷い話だ．

7　述語句省略の条件

第1節，第4節，第6節において，述語句省略が種々の場合に可能であることを見た．多くの場合，省略された述語句を補おうとすると，その述語句を「～するとは」や「～して」の形にするのが自然であった．では，逆に，「～するとは～」「～して～」のような形の文からは常に述語句省略が可能なのであろうか．明らかにそうではないようである．そこで，本節では，述語句省略の条件を考えて見たい．

なお，今までは，PとQを，専ら譲歩の意味構造における前件と後件を表すのに用いてきたが，以後，その用途を拡大し，「雨の中を来てもらった」という文であれば，Pで「雨の中を」の部分を指し，Qで「来てもらった」の部分を指すものとする．

7．1　結論を述べると，述語句省略文が表す内容に関しては，以下のことが共通すると言ってよいと思われる．即ち，ある条件Pが成立しており，それは，事態Qの不実現を予想・期待させる性質のものである．にもかかわらず，事態Qが実現している（あるいは，実現しようとしている，実現を期待されている等）．そうした状況の下で，話者は，そのことに対する評価（あるいは，そのことをめぐる疑念等）を言明している．

述語句省略の条件を，次のように纏めておく．

(42)　不適条件Pの存在にもかかわらず事態Qが実現している（あるいは，実現しようとしている等）ことに関して，話者の評価（あるいは，そのことをめぐる疑念等）を表す文において，述語句省略は可能となる．

必ずしも満足な名称ではないが，ここでは，Pを「不適条件」としておいた．条件Pが事態Qの不実現を予想・期待させるということをQの側より見れば（但し，そうした見方をすることが常に望ましいわけではない），Qの実現にとってPが不利・不適当な条件となっているとも言えるからである．[4)]

7．2　条件（42）はさらに精密化を要する試案の域を出ないものではあるが，その意味する所を，上掲の諸例に即して確認しておく．

(1)　まだ映るのに（買イ替エルトハ）もったいないわよ．

を例に取れば，「今のテレビがまだ映る（P）」以上，「テレビを買い替える（Q）」の

は不経済である．即ち，ＰはＱの実現にとって適当な条件ではない．しかし，Ｐであるにもかかわらず，相手は，Ｑの実現を提案している．話者は，このことに関して，「もったいない」との評価を下していると言える．

また，

（25）　こんな雨の中を（来テモラッテ）悪いねえ．

について言えば，「雨が激しく降っている（Ｐ）」状況は，「人に来てもらう（Ｑ）」ために適切な状況ではない．つまり，ＰはＱの実現にとり好条件ではない．にもかかわらず，現に来てもらった，即ち，Ｑが実現した．このことについて，話者は，「悪い（すまない）」との評価を示しているのである．

同様に，

（31）　私があんなことを言ったばかりに（大変ナコトニナッテ）すまない．

でも，「私があんなことを言った（Ｐ）」ことで，まさか，「大変なことになる（Ｑ）」とは予想されていなかった．「ばかり」という語の使用が物語るように，ＰはＱの実現を招くには非力なものと考えられていたわけである．「すまない」という話者の心情は，こうした状況下においてＱが実現したことに関わるものだと言える．

７．３　逆に，（42）の条件を満足しないために述語句省略が不可能である場合を見ておく．

先ず，ＰがＱの不適条件となっていなければならないということから，Ｐは，譲歩を明示する接続助詞を含む表現（「～のに」「～ながら」「～くせに」等）である場合と，意味上，Ｑの実現にとって不利な条件を表すもの（「朝から晩まで」「雨の中を」「私一人の都合のために」「わざわざ」等）である場合とがある．これに対し，例えば，順接関係を明示する理由の「ので」の場合には，述語句省略が不可能である．

（43）　×皆が休むので（自分モ休ムトハ）主体性がない．

また，話者の評価を表す文でなければならないという条件により，次のように単に事実を述べる文における述語句省略が不可能となる．

（44）　×雨の中を（歩イテ行ッテ）風邪を引いた．

８　関連・類似した現象について

述語句省略の範囲を見極めるには，種々の角度からの検討を要することになろう．ここでは，述語句省略文の定義を行う上で問題となると思われる二三の事柄を記しておく．

８．１　先ず，述語句省略文と，二文が連続したものとの関係が問題となる．上では，例えば，

（５）　大切にしていたのに酷いなあ．

（25）　こんな雨の中を悪いねえ．

を，それぞれ一個の文と考えた．これは，日本語話者の直感に恐らく合致するだけでなく，文の音調のあり方からも支持される見方であろうと思う．しかし，一方には，

（45）　大切にしていたのに…．酷いなあ．

（46）　こんな雨の中を…．悪いねえ．

のように，明らかに二文の連続と見るべきものが可能なはずである．このようにはっきりした性格のものを両極に，述語句省略文と二文の連続とが連続相を成しているものと思われる．

８．２　次に，ある事柄が困難または不可能であることを言ったり，ある事柄に対する話

者の評価を表したりするような文における省略に関わる問題がある．

（47）　片手で50キロ（＝kg）は無理だ．

（48）　子供なのに50キロは酷だ．

（49）　半年で習得は困難だ．

（50）　田中と一緒なんていやだ．

（51）　一度に三匹とは珍しい．

（52）　万引で退学とは厳しい．

（53）　テレビを見ながら宿題とは何事だ．

これらに対しても，次のように，述語句を補うことが可能である．

（47′）　片手で50キロ（持ツノ）は無理だ．

（48′）　子供なのに50キロ（持タセルノ）は酷だ．

（49′）　半年で習得（スルノ）は困難だ．

（50′）　田中と一緒（ニ仕事スル）なんていやだ．

（51′）　一度に三匹（釣レタ）とは珍しい．

（52′）　万引で退学（サセタ）とは厳しい．

（53′）　テレビを見ながら宿題（ヲスル）とは何事だ．

けれども，述語句省略文との大きな相違は，「片手で50キロ」「まだ子供なのに50キロ」等の部分が，それを含む文との関係において，一個の名詞句として構文的に完結しているということである．「は」「なんて」「とは」は，この完結した名詞句に対して付加されているものと言える．（47）～（53）においては，そうした名詞句を主題として後続の述語が述べられているが，次の例に見るように，この種の名詞句が可能なのは，主題化した主語の位置だけではない．

（54）　片手で50キロを目標に腕力を鍛える．

（55）　片手で50キロの方には景品を進呈します．

（56）　万引で退学か．それは厳しい．

（57）　一箱で50回お洗濯もこれまでと変わりません．（洗剤の宣伝）

従って，（47）～（57）に見るような省略の現象は，この覚書で言う述語句省略の現象からは一応は別物と考えてよいと思われる．ただし，ここでも，両者は明確には分ち得ない連続相の中にあるものと思われ，さらに検討を要する問題である．[5]

8．3　最後に記しておくべきは，次のような文における省略である．

（58）　どんな事情があったとしても許せない．

（59）　いくら忙しいからって無責任過ぎるわ．

（60）　子供が多いから大変だ．

これらにも，述語句省略文の場合と同様，述語句を補うことができる．

（58′）　どんな事情があったとしても（ソンナコトヲシタノハ）許せない．

（59′）　いくら忙しいからって（子供ノコトヲ放ッテオクノハ）無責任過ぎるわ．

（60′）　子供が多いから（教育費ガタクサンカカッテ）大変だ．

しかし，（58）～（60）も，この覚書に言う述語句省略の現象とはやはり異質のものだと言うべきであろう．前半の部分 ── 「どんな事情があったとしても」「いくら忙しいからって」「子供が多いから」 ── は，括弧内の表現を補うと否とにかかわらず，後続する部分 ── 「（ソンナコトヲシタノハ）許せない」「（子供ノコトヲ放ッテオクノハ）無責任過ぎる」「（教育費ガタクサンカカッテ）大変だ」 ── に直接に係って行くことが可能

であり，また，現にそのように係って行くものと見るべきだと思われるからである．

他方，述語句省略文においては，前半の部分が後続する部分に意味上直接に係って行くと解することがそもそも不可能であった．前半の部分は，省略されていると見られる部分に係ると考えて初めて，有意味な解釈が成立するのであった．これは，「まだ映るのにもったいない」のように「のに」を伴う場合については既に確認した所である．この他にも，例えば，「こんな雨の中を悪いねえ」について見ても，「悪い」という形容詞は，「こんな雨の中を」というような状況を表す表現とは意味的に直接結び付くものではない．このように，述語句省略文の前半の部分「まだ映るのに」「こんな雨の中を」は，省略された「買い替える」「来てもらった」の部分に係るとしか考えることができないのである．

II　不適条件表現に後続する表現に対する制約

1　問題

「のに」に後続し得る表現の種類には，一定の制約が存在することが知られている．例えば，次のような文は不可能である．

(61)　×寒いのに行きなさい．

(62)　×寒いのに行きましょう．

(63)　×寒いのに私は行きます．

(64)　×寒いのに行きますか．（ドウシマスカ．）

2　従来の一般化とその問題点

さて，(61)～(64)の「のに」を「けれども（けれど，けども，けど）」や「が」で置換すると，文法的に正しい文が得られる．

(61′)　寒いけど行きなさい．

(62′)　寒いけど行きましょう．

(63′)　寒いけど私は行きます．

(64′)　寒いけど行きますか．（ドウシマスカ．）

「のに」を「ても」で置換した場合も同様である．

(61″)　寒くても行きなさい．

(62″)　寒くても行きましょう．

(63″)　寒くても私は行きます．

(64″)　寒くても行きますか．

このことから，従来，(61)～(64)に見る制約は，「けれども」や「が」，あるいは，「ても」にはない「のに」の特性として，次のような形で記述されてきた．[6]

(65)　「のに」の後には，命令，要求，勧誘，意志，希望，発問等を表す表現は来ない．

この一般化に従うと，「のに」は，あたかも，後続し得る表現のムードの種類に制限を課すものであるかのようである．しかしながら，(65)は，問題の本質を逸した不当な一般化であると言わざるを得ない．それには，二つの基本的な問題点があるからである．

その第一は，規定が厳しすぎるという点である．次の例に見るように，(65)に定められた種類の表現でも，「のに」に後続することが可能である．

(66)　知りもしないのに知ったふりをするな．（命令）

(67)　真面目に話してるのにごまかさないでよ．（要求）

(68)　雨が降ってるのに行くのはやめとこう．（勧誘）

(69)　興味もないのに読みたくない．（希望）

第二は，同じ現象が広い範囲にわたって認められるという事実を看過しているという点である．即ち，「のに」を含まなくても，(61)～(64) と同様の制約が認められる場合があるのである．

(70)　×どうせ読まないくせに買え．

(71)　×こんなにも遅い時間に行こう．

(72)　×たったそれだけのために行きたい．

そして，ここでも，(66)～(69) に相当するような形にすれば正しい文となる．

(73)　どうせ読まないくせに買うな．

(74)　こんなにも遅い時間に行くのはやめとこう．

(75)　たったそれだけのために行きたくない．

3　不適条件表現に後続する表現に対する制約

では，以上の事実をどのように考えればよいであろうか．

3．1　ここでも結論から述べると，(65) に代わるものとして，概略，次のような方向での一般化を考えるのが適当であろうと思われる．

(76)　不適条件Pを表す表現に後続し得るのは，(i) 事態Qの実現の事実を述べる表現，(ii) Qの不実現を他者に命令・要求・勧誘する表現，(iii) Qの不実現を希望・意図する表現等に限られる．（Qの実現を他者に命令・要求・勧誘する表現，Qの実現を希望・意図する表現，Qの実現を推量する表現，Qの実現・不実現を問う表現等は，不適条件Pの表現に後続し得ない．）

(66)～(69) や (73)～(75) のような文が可能であり，(61)～(64) や (70)～(72) が不可能な表現であるという事実は，(76) に従えば，不適条件表現というものの性格に由来するものとして自然に理解することができる．

3．2　ある条件Pが現に成立している以上，Qが実現しないことを話者は予想または期待する．こうしたPについて，「現にPであるにもかかわらず」というような意味に表現するのが不適条件表現であった．

ただ，Qが実現しないと言っても，それはあくまで予想や期待に過ぎないから，現実には，それが裏切られてQが実現するということがあり得る．つまり，Pが実現していながら，予想や期待に反してQも実現するということが可能である．(76) の (i) は，こうした，現実におけるQの実現の表現の可能性を言っている．これは，「のに」を始めとする不適条件表現の，最も普通に見られる用法である．

(2)　冬なのに暖かい．

(3)　きれいに咲いたのにすぐしぼんでしまった．

(77)　彼はこんな夜中にわざわざ駆けつけてくれた．

(78)　彼はたったそれだけの理由で解雇された．

次に，(76) の (ii) に該当するのは，(66)～(68) や (73)～(74) のような例である．Qが実現しないと話者は予想または期待しているわけであるから，Qを実現しないよう他者に求めることに何ら矛盾はない．従って，不適条件Pの表現に，Qの不実現を命令・要求・勧誘する表現が後続し得ることに不思議はない．

（76）の（iii）に該当する（69）や（75）についても同様である．Qが実現しないよう話者が希望したり意図したりすることは，問題の予想や期待に添うものであり，やはり，問題ない．

3．3　ところが，Qが実現するよう他者に働きかけるとなると，事情が異なってくる．不適条件Pが成立する以上，Qは実現しないものと話者は予想または期待しているわけであるから，自らこれに反して，Qの実現を他者に求めることはあり得ない．（61）～（62）や（70）～（71）に見るように，不適条件に，Qの実現を命令・要求・勧誘する表現が後続し得ないという事実は，そうした理由によるものとして理解される．

同様に，Qが実現しないとの自身の期待に反して，Qの実現を希望したり意図したりすることも考えられないはずである．（63）や（72）のような文が不可能であるという事実はこのように理解することができる．

また，Qが実現しないと予想している話者が，Qの実現を推量することもあり得ない．次のような文が不可能であるのは，このためと考えられる．

（79）　×時間はないのに急げば間に合うだろう．

（80）　×時間はないのに急げば間に合うかも知れない．

因みに，（79）や（80）でも，「のに」を「けれども」や「が」，もしくは，「ても」で置換すれば文法的な文になる．

さらに，（64）のような疑問文が許されないことも理解されよう．話者は，Qが実現しないとの予想や期待を抱いている．つまり，話者は，Qが実現するか否かという問題に関して，Qは実現しないという答を既に用意しているわけである．とすれば，答に関して言わば全く白紙の状態で，Qか否かを問うことはあり得ないはずである．（64）のように，行くか行かないかと尋ねることができないのは，そうした事情によるものであろう．

最後に，次のような文について考えておく．

（81）　寒いのに（アノ寒ガリ屋ノ太郎ガ）行きますか．

形態・構文上は（64）と全く同一の疑問文であるが，これは可能な表現である．しかし，（81）は，（64）とは異なり，中立的な発問を表してはいない．概言すると，文末音調を降調で発すれば，太郎が行くわけがないという意味の反語的表現となろうし，昇調で発すれば，太郎が行くとする意見に対する疑念や不信感を表す表現となろう．いずれの場合にしても，Qの実現・不実現を単純に尋ねているわけではなく，（81）の発話の裏には，太郎は行かないとの話者の予想が明確に存在する．（64）においては，話者が答に関して白紙の状態で問いを発しており，これが，不適条件表現の性格に反したのであったが，（81）の場合には，そうした矛盾はない．（64）が不可能で，（81）が可能であるという事実は，このように説明し得るものと思われる．

以上，現代日本語の二種の文法現象について，不適条件表現なる概念による解釈・記述の可能性を述べた．さらに綿密な考察の基礎としたい．

注

1）「のに」がこうした意味を表すということは，広く認められているとしてよかろう．例えば，北川千里氏も，「PのにQ」の形をした文には，「Pであれば，通常，～Qである」という話者の「想定（underlying assumption）」が伴うとしておられる（Chisato Kitagawa ‘Adverbial

clauses of contrast and reason,' *Papers in Japanese Linguistics* vol. 2, 1973年）.

ただ，話者の「想定」（ないし「予想」）とするだけでは不十分であり，「期待」の場合もあるということに注意しておく必要がある．話者の「期待」が関わる例としては，本文の（2）以外に，次のような例が挙げられる．

（a）　待っていたのに現れなかった．

（b）　荷物がたくさんあったのに雨まで降り始めた．

（c）　静かな音楽を聞いていたのに近所で工事が始まった．

「待っている以上，現れる」こと，「荷物がたくさんある以上，雨は降り始めない」こと，「静かな音楽を聞いている以上，近所で工事が始まらない」ことを話者が「予想」していたとは言えないであろう．むしろ，「待っている以上，現れて欲しい」「荷物が多いだけでも苦労しているのだから，これ以上の悪条件は実現しないで欲しい」「静かな音楽を聞いているのだから，その防げとなるような事態は生じないで欲しい」という，話者の「期待」が表されていると言うべきであろう．

さらに，厳密に言えば，話者の予想や期待の内容を「Pである以上，～Q」であるとするのは，実は，厳し過ぎる．と言うのも，次のような文が可能だからである．

（d）　見たかったのに見られなかった．

（e）　雨が降ると思っていたのに全然降らなかった．

こうした場合の話者の予想・期待は，「Pである以上，～Q」だと言うよりも，P自体だと考えるのが適切であろう．各文は，その予想・期待Pが実現せず，それに反するQが成立することを表している．しかし，これは以下の議論の内容には関わらないので，本文で述べた「のに」の意味の一般化に従って議論を進めることにする．

2）述語句の省略は，無論，この覚書で問題としている「述語句省略」の場合以外にも広く生じる現象である．一例を挙げれば，

（a）　甲：雪が降っているよ．

　　乙：雪が？

における乙の発言は，「降っている」という述語句を省略したものと言える．しかし，ここでは，「述語句省略」「述語句省略文」という語を限定された意味でのみ用い，（a）のような例は含めないことにする．

「述語句省略文」の範囲は，例示により追って明らかにするが，厳密な定義を行う上での問題点を第4節に記す．

3）坂原茂氏『日常言語の推論』（東京大学出版会，1985年，136～164頁）．

4）不適条件および不適条件表現なる概念の厳密な定義は今後の課題として残さざるを得ないが，次のことは指摘しておくことができる．

先ず，譲歩を表す接続助詞でも，「ても」の場合には述語句省略が不可能である．

（a）　×いくら飲んでも（全ク酔ワナイトハ）不思議だなあ．

これは，「のに」を含む文の場合と対照的である．

（b）　　あれだけ飲んだのに（全ク酔ワナイトハ）不思議だなあ．

また，同様の相違が，次のような二文の間にも認められる．

（c）　×天気の悪い日でも（来テモラッテ）悪いわねえ．

（b）　　こんな雨の文を（来テモラッテ）悪いわねえ．

結局，述語句省略が可能なのは，「現にPであるにもかかわらず，Qである」というような意味構造を含む文（（b）や（d））の場合だけであり，「仮にPであっても，Qである」というような意味構造を含む文（（a）や（c）の場合には述語句省略は許されない，ということになる．こ

うしたことから，不適条件表現とは，事態Qの不実現を予想・期待させる不適条件Pを「現にPであるにもかかわらず」というような意味において表現するもの，とここでは規定しておく．

5）筆者は，

（a）　子供なのに50キロは酷だ．

において，「子供なのに」の部分は，「50キロ（持タセル）」に係るものと見た．即ち，（a）は次のような意味構造を有するものと考えた．

（a′）　［［$_P$子供な］のに［$_Q$50キロ持タセル］］のは酷だ．

しかし，これとは別の見方が提出されているのでそれに触れておく．言語学研究会・構文論グループ「条件づけを表現するつきそい・あわせ文（四）── その4・うらめ的なつきそい・あわせ文 ──」（『教育国語』第84号，1986年）では，次のような例における「のに」は「理由」を表すものとされている．（縦書の原論文での傍線は，下線に変えた．また，用例の内部での改行は省略した．）

（b）　「女役なんて，とてもがらじゃアありませんよ．自分だけのことでもやっといきてますのに，舞台にたつなんて，私にはメンドクサクて，とてもできません．」

（c）　「しかし，── ことわったのに，ぜひこいなんていうはずがないじゃないか．」

（d）　「お前はかきつけにかいてあるとおりに，兄弟いっしょに死にたいのじゃな．」「みんな死にますのに，わたしが一人いきていたくはありません．

（e）　「なにがみっともないことあるもんか．とりにこいというのに，ゆかんではない．」おぬい婆さんはいった．

（f）　「まあ，すこしおちつけ．三十にもなって．」「おちつくところがないのに，おちつけないわ．」

（g）　「きみ，このあついのに，そばは毒だぜ」といった．

「〜のに」の部分が結果的に理由を表していることは事実である．けれども，こうした例においても「のに」はやはり譲歩を表していると見得るものと思われる．即ち，上の各例の問題の箇所は，概略，次のような意味構造を持つものと考え得るはずである．

（b′）　［［$_P$自分だけのことでもやっといきてます］のに［$_Q$舞台にたつ］］なンて，私にはメンドクサクて，とてもできません．

（c′）　［［$_P$ことわったのに］のに［$_Q$ぜひこいなんていう］］はずがないじゃないか．

（d′）　［［$_P$みんな死にます］のに［$_Q$わたしが一人いきてい］］たくはありません．

（e′）　［［$_P$とりにこいという］のに［$_Q$ゆかん］］てはない．

（f′）　［［$_P$おちつくところがない］のに［$_Q$おちつけ］］ないわ．

（g′）　［［$_P$このあつい］のに［$_Q$そばヲ食ベル］］ノハ毒だぜ．

ことによると，「のに」を始めとする不適条件表現は，（a′）や（b′）〜（g′）に示したような意味を本来表すのだが，表現の再解釈を通じて新たな用法を派生させ，（b）〜（g）において下線により示されたような意味をも表すに至っている，とするのが妥当な見方であるかも知れない．これはさらに検討を要する課題であるが，少なくとも，現時点で明らかだと思われるのは，（a′）や（b′）〜（g′）のような解釈を無視してはならない ──「のに」の普通の用法に共通するものであるから ── ということである．この意味で，（b）〜（g）のような例は，次のような，「目的」を表す「のに」と同列に扱うべきものではないと思われるのである．

（h）　天に散布された星の位置をおぼえるのに，星のあいだを適当に直線でつらねて，いろいろの星座をこしらえる．

ここでは，（b）〜（g）の場合と異なり，問題なく，細い下線の部分が太い下線の部分に意味上

直接に係っている．

6）例えば，永野賢氏『学校文法概説』（朝倉書店，1958年，164頁），北川千里氏の上掲論文，牧野成一・筒井道男両氏 *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*（Japan Times，1986年，333～334頁）等にそうした記述が見られる．

付記　奈良大学リポジトリへの掲載にあたり以下の通り訂正する。表現を調整したい箇所もあるが、差し当たり製版上のミスの訂正にとどめる。（2011年10月）

166頁下から4行目
（10）→（11）

174頁3行目
（2）→（3）